

人間における器質と機能

について

高橋さやか

生命体としての人間——子どもを思うとき、どうしても、

原点復帰的にそのことを思わずにはいられない。

生きている、ということ、成長する、ということ、人格形成の現実、それはまぎれもなく生命体の現象なのである。

脊椎動物霊長類ヒト科……著しく大脳を発達させた、立って歩き、手で道具を使い、さまざまな仕事をする、この生物は、生命体として、他の生物とは甚だ異った生き方をするようになった。何と云っても、人間における器質と機能のあり様は、他の生物とは全く、といつてもいいくらい距っている。

一般に、生物の機能は器質ごとに器質に密着して存在している。光合成を営む植物の機能は、葉緑体のものであり、葉緑体という器質があれば、光合成の機能も存在する。

人間の場合、身体組織を構成している器質と、その機能のあり様は、必ずしも器質の存在即機能、という連繫を実現し

ない。それは、ヒトであることと人間であることが、事情によっては一致しないことと表裏をなすものであろう。それだけ、ヒトの器質は複雑な複合体であり、機能が実現するまでに、複合の様相が決して一様ではないこと——複合のあり方は、極めて、多元性に依拠しているものであることが考えられる。

筋肉にしろ、骨格にしろ、髄・膜にしろ、液漿にしろ、……基本的な器質構成が存在しているだけでは、人間の身体は機能しない。ことに、脳・神経組織の機能は、不断の刺激に応じることによって習練されない限り、著しく発達が阻害されるものである。

人格とよばれるものの大部分は、人間の精神の活動としてみとめられている機能で占められる。しかし、精神活動は、実は身体の活動と分ち難く連繫しており、身体諸機能の発動においてこそ、実現するものである。

感じたり、思ったり、考えたり、認識したり、判断したり、することは、眼差し・表情・身振り・舞踊等の身体表現を伴い、言語表現の形をとるにしても、音声を以てするにせよ文字等を書くにせよ、身体組織をはたらかせずにそれをなすこ

とは不可能なのである。

問題は、人間の器質と機能との間には、多岐にわたり錯綜したさまざまな修理があり、いくつもの中継点があるために、発育発達の途上——人格形成の途上で、器質が示す現象と機能が示す現象とが、相関的なものとして捉え難い、ということである。たとえば、言語障害が見られるとして、それが、器質的なものなのか、機能的なものなのか、器質的であるとして、どの器質の損傷によるものか、機能的なものとして、中枢の機能なのか、末梢のものなのか、簡単には診断がつかず、本当の意味での現象把握が容易でない場合が少くない。

器質的な欠落損傷がみとめられる場合、生命体の発育発達がうけるダメージは決定的である、と一応言えるであろう。ただ、その決定的なダメージをもたらす器質的な欠落損傷とは何なのか、ということになると、少くとも、筆者などには容易に理解が及ばない。眼という器官が損傷をうければ、視覚の機能は停止するには違いない。しかし、全く視覚的な機能が失われ、知覚作用に重大な欠陥がもたらされ、結果、精神の活動に決定的なダメージが加えられるか、ということに

なると、その答えは断乎否である。眼は失われても、見る、というに近い——見る、という実態に代り得る機能は、なお十分に存在し得る。

現場の保育者としては、機能が、身体の、そして精神の活動として、トータルにおいて生命体の欲求と発達とを充足するために活発に実現することに、心を傾注しなければならぬ、と考える。

活発に機能が発揮されることを期す以上、器質的な問題を無視するわけにはゆかないことは言うまでもない。器質に欠落損傷があることが明らかであるのに、それが無いものと同等の機能を期待することが、ひいては健全な器質器官の健全な機能をも圧迫歪曲することは、最も恐るべき教育悪である。しかし、慎重に、十分の細心さと配慮を以て、発達に必要な機能を啓発することは、保育者として器質に疑いをもつ前に、まして、器質的な要因に教育上のあきらめの正当化を押しつける前に、倦まず熱心にその方途を追求し実践しなければならぬこの一事というに足ることであると考えるものである。

(西南女学院短期大学)